

日本金属学会会報「まてりあ」60巻記念企画の 終わりにあたって

会報編集委員会委員長 竹 田 修*

本企画の冒頭に申し上げました通り、日本金属学会会報「まてりあ」が、本年(2021年)60巻を迎えました。それを記念しまして、通年で60巻記念企画を実施いたしました。本企画は、60という数字が東洋圏(中華文化圏)において特別に大事にされてきたことを踏まえた田中 秀明 前委員(現 副委員長)の発案が基になっています。2020年から、大塚 誠 前委員長によって立ち上げられた編集チームを中心に、編集委員会・事務局一丸となって企画立案、編集を行ってまいりました。まてりあが積み重ねてきた長い歴史と、日本金属学会が誇る多様な人材のおかげで、貴重な記事を多数掲載することができました。会員の皆様方、一連の記事はいかがでしたでしょうか?執筆者の皆様方には、本企画への多大なるご貢献に深く感謝申し上げます。

以下に本企画を簡単に振り返らせていただきます。

1号では、昨秋に実施しました審査を経て、表紙デザインを20年ぶりに更新いたしました。また、高梨 弘毅 本会前会長から、「年頭のご挨拶」において、まてりあとの関わりのエピソードと、今後の期待をお寄せいただきました。「あこのろ」のまてりあにおいては、山本 剛久 元委員長より本会創立時の逸話に関する記事を紹介いただきました。2号では、実学講座「金属材料実験の手引き」の掲載を開始しました。初めて金属学に触れる方にもわかりやすく図や写真を用いて解説することを狙った連載記事であり、隔月で連載を継続しています。初学者の方だけでなく、学び直す方にも目から鱗の解説がなされていますので、ぜひご覧ください。「先達からのお便り」では、増本 健 本会元会長より金属材料の発展の歴史と将来について解説いただくとともに、会員への温かいエールをいただきました。3号の「プロムナード」においては、齋藤 理一郎 氏より C₆₀・ナノチューブの研究の歴史と展望について解説いただきました。5号では、「Back to 1962」と題し、会報が創刊された年の社会状況、国産旅客機 YS-11の完成や、米国初の有人地球周回飛行の成功について紹介しました。同企画は、9号においても、国産初の研究用原子炉が臨界に到達したことや、当時東洋一の吊橋であった若戸大橋の完成について紹介しました。6号では、及川 洪 元委員長および山村 力 元委員長より、会報の変革期における編集活動について振り返っていただきました。7号では、会員歴60年を数える会員の皆様から会報との関わりや思い出を披露いただきました。9号では、本会各委員会よりこれまでの活動を説明いただくと共に、今後の本会発展への力強いメッセージを頂きました。10号では、本会各支部よりこれまでの活動と今後の展開についてお寄せいただきました。11号では、還暦の会員の皆様から本会での活動を中心にご自身の活動を紹介いただきました。

以上、足掛けで、内容も十分にご紹介できず心苦しい限りですが、どの記事も含蓄に富み、一読に値します。ぜひ、バックナンバーを手にとってみてください。

60年前も今も、金属を主体とする材料が私たちの社会にとって非常に重要なものであることは変わっていません。そして、60年後も、非常に重要なものであり続けると信じます。その礎を作るために、「まてりあ」に何ができるのか?一つには、次代のリーダーの育成が挙げられます。まてりあは、本会の情報のプラットフォームとしての機能を拡張・充実させることで、若手人材の育成に貢献したいと考えています。これからも充実した紙面をお届けするために、会員の皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

最後に、会報編集委員会を代表しまして、本企画に関わってくださいました全ての方々々に心より御礼申し上げます。

* 東北大学大学院工学研究科
2021年10月26日受理[doi:10.2320/materia.60.807]